

中つ国年代記：蛇王の台頭

Chronicles of Middle-earth
The rise of the Serpent Lord, by Mac Ward

マット・ワード：著（WD301 号より。翻訳／加筆：岡島正晃）

我らが放浪の記録者が、再び遠い土地の便りを携えて戻ってきた。彼がここに語るは、蛇王スラダーンの物語。偉大な族長が隣国ハンドの侵略からハラドを救った、その顛末である。

“どうやらここの衆は、アブラカーンの都を巡るハラドとハンドの戦いの物語を、眉唾物だと思っとるようじゃな。やれ「そんなことがあったとは考え難い」だの、「天地のあいだのどこかではなく、楽師や詩人の心の中で起こったに違いない」だの。信じとる者はほとんどおらんようじゃが、それでも細かい点に至るまで、すべて本当なんじゃよ。

そう、わしは真実を知っておる。なんせ、その場におったからな。

その頃わしは、かの地で起こったことを記録するために、ハラドの東のほうにある谷から来た連中のあいだに、人知れず紛れ込んでおった。いったい何がわしをあの土地に惹きつけたのかはいまだに分からんし、これからも分からんじやろう。じゃが歴史に残る出来事にはしかるべき重みというものがあって、見届けるべき者を自然と引き寄せるんじやよ。しかして、わしはあの日あの場におったというわけじゃ。

あの戦いの原因を理解するには、かの地のことも少々知っておかねばなるまいな。ハラドの主な領土は——つまり、国としてのハラドの、という意味じゃが、せいぜいアブラカーンの都あたりまでで、そこから東は地図にも載っておらんような、未知の集落や領地が続いておる。同じように、ハンドの西側国境のあたりも、土地土地の王が勝手に治めておるんじや。ウンパル諸侯もハンドの王も、国境付近の土地にはほとんど無頓着で、お互いの中立さえ保たれておれば、それでよしとしておった。一応ハラドは、国境沿いに幾つかの要塞を構えてはおるが、どれも壁は崩れ、守りのこぼたれた廃墟みたいなものじやよ。これら張りぼての指揮権は、そこらの族長に都合よく与えられるのが常でな。これから述べる戦が起こったときも、まさにそんな状態じゃった。その折、指揮権を与えられていたのは、野望に満ち武勇優れたる族長スラダーン——いまや二代目の蛇王として知られる男じゃ。ハーシャリイ教団の一員、カリッド・ドロズナとの反目が、彼をこの不幸な立場に追い込んでいた。明らかにドロズナめは、孤立無援なこの任務で、宿敵を永遠に葬り去る気だったんじやろう。じゃが、運命が示した道はまったく違っておった。

3010 年が明ける頃には、すでにスラダーンは国境守備隊の指揮官として、多くの年月を重ねておった。権力の座にある諸侯はほとんど彼を忘れ去り、彼のほうも空しい任務に心をすり減らしていた。無論、国境は静かだったわけではなく、ハンドの略奪隊や傭兵たちが、ひっきりなしに襲ってきてはいたんじやが、スラダーンの哀れな守備隊は 500 を数えるばかりで、襲撃を防ぐに足る作戦はなにひとつ為し得なかったんじや。スラダーンは部下たちを無双のつわものへと鍛え上げ、駐屯していたパーズガール（Pâzghar）の砦に鉄壁の守りを敷くことで、満足するよりなかった。

じゃがその春遅く、スラダーンの運命は再び変わった。ハンドの大軍が、国境から溢れ出してきたんじや。それは単なる略奪隊でも、主のいないはぐれ傭兵でもなく、実に全ハンド軍の十分の一、6000 もの大部隊じゃった。わしにはいまでも、この侵略の理由はしかとはわからん。というのも、ハンドはわしにとって馴染みのない土地じゃからな。わしの足跡は砂の混じったハラドの土にも、カレナルゾンの緑の野にも、灰にまみれたモルドールのぬかるみにさえ刻まれておるが、ハンドにはついぞ行った試しがない。聞いたところでは、攻撃を指揮していたハンドのヴァンガリ

ス王が、玉座から追われるのを恐れるあまり、戦場での勝利でその地位を守ろうとした、ということらしいが、これとてどこまで本当か。いずれにせよ、ヴァンガリスは軍を率いて直接パーズガールに乗り込み、スラダーンとそのわずかな手勢がアブラカーンより東にいる唯一の敵だと見抜くと、崩れかけた壁の内側で哀れなハラドリムの族長をひっ捕らえてくれようと考えた。もちろん蛇王は、そう簡単に捕まるような相手ではなかったがな。

パーズガールの守備隊が危険に気づいたとき、ハンド軍は城砦の壁際まで押し寄せておった。すでに時間はなく、腐った壁がハンド軍相手に長くは保たないのも明白じゃった。他に打つ手もないスラダーンは、ハンドの大軍が壁に群がっているあいだに、部下たちに可能な限りの準備をさせた。木の柵で石壁の隙間を塞ぎ、武具を装備し、できるだけ命を大事にしながら、いよいよとなればそれを捨て去る覚悟を決めさせたのじゃ。かくも絶望的な状況でさえ、部下たちが誰一人として逃げ出さなかったのは、ひとえに将たるスラダーンの器ゆえじゃろうな。

スラダーンと部下たちの守りは、翌朝早くに試されることとなった。もはや勝ったも同然と考えたヴァンガリス王は、軍の一部だけを守備隊へ差し向けた。急ごしらえの攻城梯子を携えた、たった 2000 人の兵たちじゃ。それでもなお、数の上ではスラダーンの守備隊の 4 倍もおったから、パーズガールの城壁上では血みどろの、絶望的な戦いが繰り広げられた。スラダーンと彼の一番の腹心ハラーン (Harân) は獅子奮迅の戦いを演じ、敵が囲みを破るところ、どこへでも兵を率いていった。ハンドの戦士たちはパーズガールの壁へと三たび打ち寄せ、鋼と怒りと戦士の魂によって、三たび押し戻された。とうとう最後の突撃のあと、ハンド人たちの心は折れ、どんなに脅そうが褒美をちらつかせようが、もうその日のうちは戦わせることができなかった。パーズガールは一時の平穏を贖ったが、守備隊の数は半分まで減っていた。

もちろんスラダーンは敵の攻撃が終わったわけではなく、一時中断されているだけだとわかっておった。彼はその間隙を縫って、脱出作戦を敢行した。夜の間に紛れ、ハラーン率いる 50 人の兵がパーズガールから打って出ると、囲みを裂いて敵を引き付けた。実はスラダーンはこの囂部隊を自ら率いるつもりじゃったが、ハラーンに反対されていたんじゃ。ハラーンは言った。「蛇王自ら打って出るなど、控え目に言っても愚かなことです。貴方の導きは、ハンド軍を蹴散らしたその暁にこそ、真に必要となりましょう」。腹心の言葉を認めたスラダーンは、冷静さを取り戻した。彼は悲しみに堪えながら、残る手勢の先頭に馬を駆り、ハンド軍の戦列の最も薄い部分へ突撃した。この完璧な陽動と奇襲をまえに、ヴァンガリスの兵は戦列を立て直すのに手間取り、その隙にスラダーンは包囲を文字どおり切り拓いて、丘へ逃げ込むことに成功した。じゃがハラーンとその部下たちは、そうもいかなかった。彼らの陽動の効果はてきめんで、多くの敵をも屠ったが、遂にはこの若き族長もろとも、全員が殺されてしまったんじゃ。

続く数週間、スラダーンは残りの兵を率いて、ハンド軍に死に物狂いの奇襲を仕掛け続けた。丘から出陣すると声も挙げずに襲い掛かり、大軍ゆえに鈍重な敵が反撃に出るまえに、さっと退くという作戦じゃ。あとに残るは混乱と狼狽ばかりで、ハンド軍の士気は少しずつ、じゃが確実に低下していった。時のヴェールを透かしていまの目で見れば、わずかな敵の尻尾を空しく追回すこの時のヴァンガリスは、愚か者と映ろうな。まあ、多少はそれも真実じゃろうが、パーズガールでスラダーンを討ち損じたせいで、彼が大いに苛立っておったことも、考えに入れなくてはなるまいて。多くの王がそうであるように、彼もまた自尊心の高い男じゃったからな。それに、蛇王の兵力が吹けば飛ぶほど小さなものだったことにも、気づいていなかったんじゃろう。本当のところ、侵略が始まって 1 ヶ月も経つ頃には、スラダーンの手勢は 100 人ほどしか残っておらなんだが、死んでいった部下たちがその 10 倍もの敵を倒しておったから、規模を見誤っても無理はなかったんじゃ。

結局ヴァンガリスは、3 週間に渡る苛立たしい攻防の末、ついにスラダーン軍の追撃を諦め、一路アブラカーンへと西進をはじめた。じゃがこの時までには、侵略の報せは辺境の隅々まで広まっており、多くのハラドの族長たちが兵を率いてアブラカーンの防衛に馳せ参じていた。アブラカーンの長老たちも、市壁が侵略者たちを跳ね返すものと信

じておったようじゃ。数日の間を置いて、スラダーンはようやくヴァンガリスの追撃を免れたことを悟った。彼はまだ馬に乗れる部下をすべて引き連れ——といっても、たったの 60 人だったが、逆にヴァンガリスの後を追った。

かくてアブラカーンは、この物語の最後の舞台となった。ヴァンガリスに追いついたスラダーンが見たもの、それは未だ 4000 を数える敵軍と、血まみれの戦いじゃった。あろうことか、ハラドリムの守備隊を指揮するハーシャリンは、堅牢な堡壘に籠っての防衛戦を説く長老たちの助言を潔しとせず、正面からハンド軍を迎え撃たせていたのじゃよ。こんな戦術が上手くいくのは、守備隊の人数が敵と同じぐらい多いか、こやつが自分をひとかどの人物だと信ずるのと同じぐらい、部下も狂信的な場合だけじゃわい。当然のごとく、ハラドリムの戦線は瞬間に崩壊し、指揮官のハーシャリンも正午を待たずに、あっけなく殺されてしまった。戦場全体を見渡せる高台からわしの見たところ、唯一アブラカーンの商人護衛団は雇い主を守って持ちこたえておったが、あとはどこもかしくも滅茶苦茶で、絶望がはびこりつつあった。2000 人のハラド兵が、壊走の瀬戸際に立っておったのじゃ。

じゃがこの日、並ぶ者なき名声を手にしたのは、他ならぬスラダーンじゃった。骨の髄まで疲れ切っていたにもかかわらず、彼は部下と共に、ヴァンガリス軍の背面に槍のように突っ込んでいった。60 人にも満たぬ傷つき疲れた男たちが、黒き蛇の旗のもとハンドの戦列を引き裂き、立ち向かう者すべてを斬って捨てた。矢も、槍も、剣も、なにもも彼らには届かぬかに見えた。多勢に無勢でありながら、怒りが彼らに力を与え、遂にスラダーンたちはハラド軍の中心、ヴァンガリス王その人の前まで斬り進んだ。部下たちが王の親衛隊を相手取り、スラダーンはヴァンガリス王に討ちかかった。剣の技量では圧倒的に勝るスラダーンじゃったが、いまや鋼の意志で鞍にしがみつくのがやっと、対してヴァンガリス王はまったく疲れていなかった。戦いが始まるや否や、2 騎は互いを追ってくるくと回りながら、目にも止まらぬ速さで斬り合い、受け流し合った。両雄はまったくの互角と見えたが、蛇王の技と素早さは、鉄の板を何枚も連ねた敵の鎧に鈍らされていった。転機が訪れたのは、ヴァンガリスの兵が槍でスラダーンの馬を殺した瞬間じゃった。スラダーンが戦の埃を払って立ち上がり、そのまま剣を突き上げると、切っ先が鎧の隙間をくぐり抜け、ハンド王の脇腹に深々と埋まったのじゃ。痛みで絶叫しながら、ヴァンガリスは鞍から転げ落ち、埃のなかに横たわった。二重の意味で墮ちた王は、復讐に燃えるスラダーンの一撃のまえに、もはや無力じゃった。信じられないほど素早く、族長の剣は黄金の仮面の目に開いた穴へと突き落とされ、ハンド王の命を終わらせたのじゃ。

その瞬間、戦場の目という目が、スラダーンの勝利に吸い寄せられたかのようじゃった。瞬きするほどのあいだ、新たな歴史の誕生を告げるかのような静寂があたりを満たし、それからまた殺し合いが始まった。じゃが王の死によって、戦の流れは完全に傾いておった。はじめはひとり、またひとり、続いて部隊が丸ごと雪崩を打って、ハンド兵たちは逃げ去った。ものの 1 分と経たぬうちに、ハンドの全軍は総崩れとなり、彼らの手にかかって死ぬよりないと思われていた者たちの、復讐の刃に斃れたのじゃ。

やがて 1 年が過ぎる頃には、あの日の戦いの勝因を紐解く、多くの説が囁かれておった。ある者は、ハンド軍のほとんどが傭兵で、アブラカーンの長老が差し出した富に釣られ、戦のさなかに裏切ったのだと主張しておった。またある者は、歴史のタペストリーを遠くから見るならば、ハラド族長たちの多大な努力こそが最大の勝因だと説いておる。なかにはヴァンガリスを殺したのはスラダーンではなく、あるハーシャリンだったと言う者までおった。はっきり言うが、そのどれひとつとして、わしのこの目には映っておらん。疑いも矛盾もなく、あの日の勝利を呼んだのは、ひとりの男のいさおしだったのじゃよ。”